

伊平屋島・伊是名島における染織の概要

與那嶺 一 子

Report of the Dyeing and Weaving in Iheyajima Island and Izenajima Island

Ichiko YONAMINE

伊是名島・伊平屋島総合調査報告書、沖縄県立博物館・美術館 別刷

2019年3月15日

Reprinted from Survey Reports on Natural History, History and Culture of
Izenajima and Iheyajima Islands, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

March, 2019

伊平屋島・伊是名島における染織の概要

與那嶺 一 子*

Report of the Dyeing and Weaving in Iheyajima Island and Izenajima Island

Ichiko YONAMINE

はじめに

伊平屋島、伊是名島は琉球王国時代には、伊平屋間切として一つの行政区であった。明治以降は伊平屋村となり、昭和15（1940）年に分村する。今回両島の染織の概要を調査したが、分村以前の記録には、伊平屋間切、伊平屋村でまとめられているものが多く、どの島を示す事柄か不明の部分がある。また、近代以後の染織についての情報が少なく、2017年～2018年、伊平屋島、伊是名島の両島に渡り、聞き取りと両島に残る染織品の調査を行った。

伊是名島旧家に残る染織品については、詳細を記した調査報告が刊行されているため¹、今回の調査対象から除き、明治以後の両島における染織の状況と染織品を主に調査した結果を報告する。

戦後、副業として大島紬の出機に従事したことや養蚕の様子がかがえた。

両島の資料館に収蔵されている染織資料のうち、特徴的な作例と、染織に係る用具等について採寸し撮影した。

この総合調査以前にも下記のとおり調査しており、その結果も踏まえて報告する。

平成元（1989）年3月 伊是名の文化財調査

平成10（1998）年10月 伊是名村ふれあい民俗館染織用具調査

平成16（2004）年3月 名嘉家染織品調査

平成18（2006）年11月 銘苅家染織品調査

平成20（2008）年8月 名嘉家染織品調査

平成27（2015）年2月 紗布・芭蕉紺地布・紅型衣裳調査

調査の概要

2017年2月：伊平屋島にて聞き取り調査（島尻・田名にて2名）と伊平屋村歴史民俗資料館に残る染織品の調査を行った。

2018年3月・10月：伊是名島にて、ふれあい民俗館に残る染織品の調査と聞き取りを行った。

聞き取り調査は年齢80代を対象として実施したが、対象者は戦前、10代初めの学齢期にあたり、本人がその当時、染織に従事することはなく、母親達の様子を記憶をたどって話題を提供してくれた。

伊平屋島、伊是名島における染織の概要

両島の資料館には、芭蕉布と絹織物が残されている。これらは近代の島の生活を語る貴重な資料となる。これまで両島から発行された村史や字史²に記載されている島内で製作された染織品は、芭蕉布、木綿布、養蚕による絹布で、特に芭蕉布は普段着から晴れ着まで幅広く利用されており、両島の衣生活に無くてはならないものであった。また、養蚕は戦前から戦後にかけて両島の産業史を語る上で重要なものである。文献、残された用具や絹織物から、養

*沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1
Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, Japan

蚕が盛んだった様子がうかがえ、両村での聞き取りによっても、そのことが裏付けられた。

〔芭蕉布〕

芭蕉布は近世から近代にかけて、両島でも家族の衣料として女性たちによって織られていた。芭蕉のウー畑（芭蕉畑）は、屋敷内の畑（アタイ）や野原の日当たりの良い場所、谷間などにあった。芭蕉布の製作方法は『伊是名村史 下巻』（平成元年）、『伊平屋 田名字史』（平成15年）に詳しく述べられており、ここでは割愛したい。

村史、字史によると、芭蕉布は「上着、常着、仕事着」に仕立てたとある。夏の日常着（フィージーチャ、ヤーカラチャ）、労働着（ハルサーチン、スディチラー、スリチラー）、外出着、晴着（クンジ、バサジン）などがあった²。

伊平屋村民俗資料館には4領の芭蕉布が収蔵されている。1領はフィリッピン苧と呼ばれた国外の芭蕉布である。これ以外に、無地（2領）、経縞模様（2領）があり、いずれも和服仕立あるいは、部分的に琉服の形態を残す和服仕立てで戦前から戦後にかけての日常着だったと思われる。

伊是名村のふれあい民俗館には6領の芭蕉の着物が残されており、無地、経縞模様、紺の柄物が収蔵されている。オーサゲン・ウワーサゲン・オーフゲンと呼ばれている。

芭蕉の繊維から績んだ糸を貯める芭蕉用のカゴ（ウーウミゾーキ、ファーラ）、撚糸用の糸車（ヤーマ）、整経機（カセー、ハシー）が伊是名村のふれあい館には展示されている。繊維を取り出す「鋏べら」と呼ばれる道具は残されておらず、現在、大宜味村で使われるエービと同じ竹製品ではないかと思われる。

近世末の史料（『伊平屋新垣家文書』の「諸品注文集」³）の那覇から買い入れる注文可能な目録には、芭蕉布が含まれており、芭蕉布を購入した可能性もある。同文書にある「白芭蕉布壺反」には「表衣之等二而紺地染付」の追記がある。クンジは晴着であることから、特別誂えして購入することもあったと思われる。

〔木綿布〕

両島では綿を栽培し自家用木綿糸を紡ぎ木綿布等が織られていた。冬の晴着、クンジは木綿であった。

『田名字史』には、綿花を栽培し、綿を綿繰りヤーマ（サナバナシ）⁴で、種と綿を分け、糸車（ハタ）で撚糸し経糸（カシ糸）をつくり、冬物を仕立てたことが記されている²。

上質な島の綿でつくる木綿衣は、薪木を那覇まで運送する船に積み販売し、その代価で衣類や日用品を買い入れしている²。先の「伊平屋新垣家文書」の「諸品注文集」には、「白木綿あや衣裳壺枚」「小緑紺地布壺反」「喜屋武本部布壺反」など明らかに木綿布と思われる品物もみられる。小緑布は那覇小緑辺りで織られた木綿布で知られ、また喜屋武本部布は南風原の喜屋武、本部で織られた木綿布のことである。王国時代末期には、島の木綿布も販売されていたが、別の地域で織られた木綿布も買入れ、主に冬物として使われていた可能性もある。

昭和初期の事と思われるが、糸満から買い入れた木綿布は「イチマンゲン」と呼ばれていた⁵。糸満には明治45（1911）年に宮城織工場、大正7（1919）年に新垣織工場、知名織工場が設立。宮城織工場では大正3（1914）年に足踏織機が導入され、糸満縞と呼ばれる織物が生産されており⁶、このような縞木綿布が伊平屋・伊是名両島にも流通していたと考えられる。

〔養蚕及び絹製品〕

養蚕は近世まで遡る。しかし、いつ頃から始まり、どのような規模だったのか、殆ど分かっていない。琉球王国が廃された頃に適用された徴税方法⁷を見ると、真綿百匁は米式斗五升に代えて納めることができた。しかし、伊平屋島から琉球藩に上納されたとする「真綿参拾貫匁」の記述については根拠史料が確認できず⁸、本稿では近代における養蚕業をまとめることにした。

琉球王国、琉球藩そして沖縄県へと移行していきなかに、養蚕業は、新たな産業として注目され、沖縄各地に普及していく。

近代養蚕が本格化する以前の明治20（1887）年代に久米島、伊平屋、粟国、その他の離島で、多産繭（綿繭）を真綿にし、引き伸ばして糸づくりを営

む者も確認されているが、量産できるものではなかった⁸。その養蚕の様子は下記のようなものであったと伝わる。

ニクブクか蓆に蚕を養い、黄色の円形のひらたい繭を得る。座敷を広く使うので、多量飼育は困難であった。蘇鉄葉や藁を利用し結繭させていた²。

明治30年沖縄県は、養蚕奨励のため専任技手を農事試験場におき、各市町村の巡回指導を行う⁸。

統計記録(表1)によると明治16(1883)年に養蚕農家は両島合わせて320軒あり、明治23(1890)年には470軒と増えているが、前述のとおり養蚕としては効率の良いものではなかった⁹。産業として本格化するのは明治29(1896)年以降となる。飼育製糸方法を学び、講師を招聘するなどし、養蚕で重要となる桑園が増えるのは明治39(1906)年頃からである。

さらに飛躍的に増産するのは、昭和8(1933)年に沖縄県が産業振興十五カ年計画を制定し、砂糖偏重からその他の農事や養蚕業のために耕地割譲が認められた頃になる¹⁰。昭和8年、9年と大正4年の生産高を比較すると倍以上となっている(表1)。

大正14～昭和8年まで伊平屋村長を務めた新垣浦助は在任中、各字に養蚕室を設けさせ、片倉製糸と種子繭飼育¹²の契約を結んでいる²。沖縄県の助成を受けて共同蚕室や乾繭所(字我喜屋)が設置され、駐在技手が配置されるのもこの頃になる。

また、伊平屋村、伊是名村へと分村した後、伊平屋村長諸見清吉は、昭和17(1942)年瑞泉社¹³に依頼し、我喜屋の乾繭所を整備している。

伊是名村でも養蚕は各家々で行われており、乾繭所¹⁴は現在の村役場の所(字仲田)にあり、繭出しを行っていた。

両村史の養蚕についての記述を時系列的にまとめると下記のとおりとなる。

明治29年 駐在巡查山路氏が桑木の植付けを奨励

明治35年 諸見清兵衛(字我喜屋)、佐久間盛起(字前泊/首里出身)が那覇南陽館で日本品種の飼育製糸法を受講。

明治39年 島長名嘉千松(字我喜屋)が、我喜屋に講習所を設け、前駐在濱之上氏を

講師に招き一般に養蚕を普及した

昭和2年 県の助成で我喜屋に共同蚕室を設置。

昭和3年 養蚕の駐在技手(仲村千代元)が配置。

昭和4年 県の助成により乾繭所を設置。

昭和14年 7月に伊平屋村、伊是名村に分村

昭和17年 瑞泉社により、我喜屋の乾繭所を整備。

昭和25年 伊平屋村我喜屋区が春繭々種の需給地区に指定。

昭和58～63年 伊是名村仲田、伊是名の5軒の農家が繭出しのため養蚕を行う。

戦後、沖縄県で養蚕がスタートするのは昭和21(1946)年名護市からである。屋我地村運天区四班ヒヌク原では戦時中に200頭の蚕児を非難させており、これが養蚕再開に役立てられた¹⁵。

伊平屋村史等によると戦後は米軍上陸により、桑園が荒廃し、さらに養蚕具の焼失も加わり、村の農業としての養蚕は廃れていったようである。我喜屋にあった乾繭所は昭和21(1946)年当時から使われておらず、そこを活用して診療所が再開している。また、昭和25(1950)年、伊平屋村役場の移転新築にあたり、老朽化した乾繭室から不足した資材を調達したとあり、その頃、伊平屋村の養蚕は終わったものと思われるが、我喜屋誌には、昭和25～28年頃まで養蚕が続いていたことをうかがわせる記述がある。その頃、乾繭所の設備は一部可動し、我喜屋区では養蚕が続いていたようだが、詳細は確認できなかった。

伊是名島では昭和16(1941)年頃から養蚕は下火となり、戦後には次第にみられなくなる。

その後、養蚕が新たな形で登場するのが昭和50～60年代である。伊是名村仲田(3軒)と字伊是名(2軒)の5軒の農家が須藤製糸株式会社¹⁶と契約し繭出しを行っている。

養蚕施設は各家の牛小屋等を改築した。字伊是名のYN氏(昭和25年生)は、その設備投資に農協の近代資金を当てている。乾繭室は仲田のKN氏の養蚕室(プレハブ)に併設しており、この事業はKN氏の声掛けでスタートした。しかし桑葉が不足し、空き地に桑を栽培したが、それでも不足気味だった。当時の養蚕は専業であったが、繭になる製品

率が低くなり、採算が取れなくなり、昭和63(1988)年頃には終えている¹⁷。

平成17(2005)年4月時点で、須藤製糸は製糸事業から撤退する。日本において、戦後、288ヶ所あった機械製糸の工場は、現在、山形県酒田市の松岡株式会社(旧松岡協同製糸)、群馬県安中市の碓氷製糸株式会社(旧碓氷製糸農業協同組合)の2社だけとなっている¹⁸。

両島における養蚕業の流れを追うことで、日本の近代産業であった養蚕や製糸業の隆盛と衰退の歴史を知ることができることはたいへん興味深い。

〔大島紬の出機〕

昭和50年代、両島では大島紬の出機をしていた時期がある。

伊平屋島では昭和48年、田名分校と島尻分校が伊平屋小学校に統合される。島尻ではその校舎を活用し、20台程の織機を置き、7名が副業として出機に従事していた⁵。

伊是名島でも、聞き取りで出機の話をつかしたが、詳細は不明であった。しかし、伊是名村ふれあい民俗館に展示されている高機は名瀬市で昭和47(1972)年に製作されたもので、大島紬との関係があったことが推察される。高機のプレートには「優良織機」「製造年月日 昭和47年10月／製造元 きょうのう紬織機製作所 名瀬市港町15の3 (TEL (2) 0351・4601)」と記されている。

大島紬は奄美大島で近世以前から織られている紬織物で、昭和45(1970)年から昭和61(1986)年まで20万反を超える生産反数であった¹⁹。その時期に大島からの出機を受けていたものと思われるが、経緯や仲立ちした業者などを確認することはできなかった。

〔伊是名島旧家に残る遺品〕

伊是名島には尚円に関わる旧家に伝世する染織品があり、伊是名島の染織の概要を知る上で欠かせないので、その内容を記しておく。詳細は既に報告書が刊行されている¹。

＊銘苅家

①絹浅地紋紗布：縦49.9cm 横48.8cm

②絹浅地蓮唐草紋様大帯：幅15.9cm 長さ481.2cm

③木綿茶地衣装：丈143.5cm 衿70.4cm

④絹茶地衣装(衿)：丈157.4cm 衿75.1cm

＊名嘉家(阿母加那志の遺品)

①絹黄色地花鳥紋様衣装：丈155.0cm

②絹黄色地錦織ティサージ裂地：幅46.3cm 長さ45.5cm

③芭蕉紺地布(中・絹黄色地花紋様刺繍裂：縦54.0cm 横66.0cm

④麻紺地布(中・絹黄色地花紋様刺繍裂)：縦72.0cm 横78.0cm

⑤絹紫地衣装(衿)：丈139.0cm 衿63.5cm

⑥絹黄色地桐衣(衿)：丈96.1cm 衿68.0cm

⑦木綿赤地衣装：丈124.0cm 衿61.0cm

⑧麻白地衣装：丈118.5cm 衿59.7cm

⑨絹白地衣装：丈138.0cm 衿81.7cm

⑩絹白地桐衣：丈89.0cm 衿71.2cm

⑪木綿白地桐衣：丈88.0cm 衿66.5cm

＊伊礼家(二かや田の阿母の遺品)

①黄色地雲龍紋裂地：縦35.0cm 横32.3cm

〔伊是名島勢理客に残る紅型衣裳〕

伊是名村勢理客の公民館には、旧暦8月11日に行われるイルチャヨー祭で使われた紅型衣裳4領(紺地紅型2領・黄色地紅型2領)が保管されている。

イルチャヨーは、耕作と火を教えたと言われる神「イルキア・アマリ」の神事と同系の祭りで、秘祭として伝わった、豊作や航海安全を祈願する祭りである。

紅型衣裳は組踊(「護佐丸敵打」が伝わる)の場で一對として着用されていたとうかがったが、詳細はすでに不明であった。

『伊平屋新垣家文書』³には、那覇での注文カタログに「形付布壹反」とあり、この衣裳も、那覇から購入したものであろう。

紅型衣裳は紺地・黄色地ともに大模様型の染地型で、紺地は、身頃は片面染だが衿と両袖は両面染である。黄色地は全て片面染である。染めは明らかに紺地と黄色地で異なり、黄色地は紺地に比較すると

模様、染色ともに粗い。

布帛素材は広幅の木綿布で、織りは紺地が密だが、双方とも輸入綿布である。

紺地紅型は上部に雲に枝垂桜、中に飛び交う蝶、下部に菖蒲に流水模様が染められている。型紙は3種類になる。下部の菖蒲に流水模様は、竹富島喜宝院蒐集館所蔵の袖無し羽織と同柄であり、この羽織は明治初めの作と伝えられている²⁰。

黄色地紅型は菖蒲に流水蛇籠模様が繰り返されている。類似柄の作例は多く、沖縄県立博物館・美術館、沖縄県立図書館（沖縄県立博物館・美術館寄託）などがある。

4領とも何度か補修した様子が確認された。採寸をみると、琉球王国時代の琉服の形態を踏襲し、縫いもなみ縫いだが、衿は7.8～6.5cm幅に折り返して衿付けられ、襷もみられない。

〔両島の資料館に残る染織品〕

伊平屋村歴史民俗資料館には6件、伊是名村ふれあい民俗館には20件の染織品が収蔵されていた。

芭蕉布、木綿布、養蚕で得た絹織物などがあり、

島の暮らしを知る手がかりである。

染色にはクワ、フクギ、テカチ、クチナシの実、フルギ（サルトリイバラ）、イーク（モッコク）が使われ、黒染めは腐植土の泥に浸したタルシ染めが行われた。田泥による鉄媒染もあったようだ²。

化学染料は昭和初期に入ってきたとのことである²¹。

調査した個々の作品については、資料紹介でまとめたので、参照されたい。

おわりに

今回、両島の染織の概要調査したことで、近世から近代にかけての島の暮らしはもちろん、日本の製糸業や大島紬の盛衰にも触れることができた。今後、さらに内容を深めていきたい。

調査にあたっては、伊平屋村教育委員会、伊是名村教育委員会には多大な協力を頂戴した。記してお礼申し上げる。

表1 明治、大正、昭和15年までの養蚕の推移

*「明治、大正、昭和十五年までの養蚕の推移」『伊是名村史 下巻（島の民俗と生活）』を参照して與那嶺が表を整理しまとめた。

	戸数（戸）	繭生産量	生産額（円）	備考
明治16(1883)	320	28.00石	—	
明治23(1890)	470	1.80石	—	
明治24(1891)	470	0.20石	—	
明治25(1892)	470	39.00石	—	
明治26(1893)	470	38.00石	—	
明治43(1910)	54	13.24石	335	
大正1(1912)	167	43.28石	1,198	
大正3(1914)	414	52.73石	1,480	
1915 (T4)	234	39.89石	1,076	
1933 (S8)	—	3,297貫	12,624	
1934 (S9)	427	2,554貫	9,319	
1935 (S10)	437	4,070貫	17,199	
1936 (S11)	437	5,830貫	22,143	
1937 (S12)	437	4,910貫	21,536	
1938 (S13)	437	5,535貫	21,652	
1939 (S14)	437	2,780貫	17,706	分村後（伊是名島）
		3,110貫	18,915	分村後（伊平屋島）
1940 (S15)	267	4,467貫	46,016	伊是名島のみ

*生産戸数は明治16年に320戸従事、昭和10年には437戸に増加する。

分村後の昭和15年に戸数は伊是名村で267戸、約半分になるが、生産額をみると前年度の伊是名村だけの生産額17,706円から約倍近くの46,016円に増えている。

*石は体積の単位で、1石は約180ℓ、約0.18m³にあたる。貫は重さの単位。1貫は約3.75kgである。

写真1 伊是名島勢理客に残る紅型衣裳 4領



紺地紅型 -1



紺地紅型 -2



黄色地紅型 -1



黄色地紅型 -2

〔伊平屋村歴史民俗資料館の染織品〕

1 フィリピン苧経縞着物

丈113.2cm 衿（袖幅28.0cm・肩幅28.5～29.0cm）

布幅34.0cm 織密度（経28本 緯20本／1cm）

地糸、経縞（紫、緑）は経緯ともに殆ど撚糸されず、機結び目がある。地糸は絹糸にも見えるが、フィリッピン苧である。縞糸には結び目が殆どみられず、絹糸と思われる。反物を購入し布に仕立てたものではないかと思われる。

縫い糸は白木綿。木綿布の肩当あり。袖は平袖の袖口を内側に折り、鉄砲袖に直す。袖付の脇（人形）は11cm。下前衿先に白木綿布を縫い足す。縫い糸は木綿。裾や衿下は三つ折り衿け縫い。前幅は後幅より狭いが、肩から裾にかけて広がる。木綿の肩当てが付く。

宮城千代松旧蔵 平成18年7月20日寄贈



2 芭蕉布（男性用）

丈123.0cm 衿（袖幅30.8cm・肩幅29.6cm）

布幅33.0cm 織密度（経22本 緯18本／1cm）

生成りの無地。地糸は経緯ともに芭蕉。機結び目がみられ、経糸は撚糸されているが、緯糸は撚りかけされていない。

和服。裾や衿下は三つ折り衿け縫い。袖口は小袖、袖付の脇（人形）は12cm程、衿には共衿が掛けられる。前幅は後幅より狭いが、肩から裾にかけて広がっている。白木綿布（ガーゼのような晒か）の肩当てあり。

伊礼幸雄旧蔵 平成14年11月26日寄贈



3 クンジー（男性用）

丈123.0cm 衿（袖幅33.0cm・肩幅30.3cm）

布幅37.0cm 織密度（経24本 緯22本／1cm）

地糸、縞糸ともに絹糸（引き糸）。黒に染色。みやこ染などの化学染料と思われる。

和服。前幅は後幅より狭い。前身頃は肩から裾にかけてほぼ同寸。袖口は小袖、袖付の脇（人形）は10.8cm。木綿の肩当てあり。

旧蔵者の姑（与那覇ウミト）が夫のために織ったクンジー。婿（与那嶺穀）に譲ったもの。舅夫婦は戦前、大阪で生活しており、昭和16年、沖縄に戻り以前していた養蚕を再開していたとのこと。

与那嶺穀旧蔵 平成13年8月16日寄贈



4 芭蕉布（男性用）

丈125.0cm 衿（袖幅31.8cm 肩幅29.3cm）

布幅33.0cm 織密度（経28本 緯11本／1cm）

生成りの無地。地糸は経緯ともに芭蕉。機結びがみられ、経糸は撚糸されているが、緯糸は撚りかけされていない。

和服。縫い糸は木綿。布の両端（耳）の経糸に木綿が使われている。

裾や衿下は三つ折り衿け縫い。袖口は小袖、袖付の脇（人形）は7.5cm。衿には共衿が掛けられる。前幅は後幅より狭い。前身頃は肩から裾にかけ同寸。木綿の肩当てがつく。

与那嶺穀旧蔵 平成13年8月16日寄贈



5 芭蕉布経縞

丈106.8cm 衿（袖幅29.0cm 肩幅27.0cm）

布幅33.0cm 織密度（経24本 緯11本／1cm）

地糸、縞糸は経緯ともに機結びがみられ、経糸は撚糸され、緯糸は撚糸されていない。

縞糸は茶色に染色されている。シャリンバイの植物染料のようにみえるが色材は不明。

和服。縫い糸は芭蕉。裾や衿下は三つ折り衿け縫い。袖口は平袖、袖付の脇（振り）は16cmあるが、身八つ口は空いていない。袖口は木綿糸で縫い直しの跡あり。前幅は後幅より狭く、前身頃は肩から裾にかけて広がる。

旧蔵者の姑（与那覇ウミト）が織ったもの。

与那嶺穀旧蔵 平成13年8月16日寄贈



6 紺地紺模様型付

丈122.6cm 衿（袖幅32.0cm 肩幅30.0cm）

布幅34.3cm 織密度（経34本 緯25本／1cm）

地糸は経緯ともに絹（引き糸）。

染色は型紙を使い糊防染し紺色に地染め（浸染）した型染め（片面染）。型送り寸法は29cm。色材はみやこ染などの化学染料か。

伊平屋島で糊防染の型染をするのは難しく、購入した布を縫製したのではないかとと思われる。戦前、伊平屋島から泊まで船を出しており、そこで購入した可能性がある。

裾や衿下の縫製は三つ折り衿け縫い。袖口は平袖。袖下は19cm程縫い縮められており、袖はもう少し振りの長い袖（長袖）であった。衿下には揚げ（10cm）あり、縫い直して、祭り行事などに使用したものと思われる。詳細は不明。

総合センター旧蔵 平成14年7月9日寄贈



〔伊是名村ふれあい民俗館〕

1 絹黒地格子縞模様着物

丈134.5cm 衿（袖幅32.5cm 肩幅32.0cm）

布幅35.0cm 織密度（経32本 緯22本／1cm）

地糸は経緯ともに絹（座繰りで引いた生糸）。絹織物は「イトウジン」と呼ばれている。黒の地色の色材はみやこ染などの化学染料と思われる。

模様は「コーシ」と呼ばれる。

和服。男性用。袖口は小袖、袖付の脇（人形）は10cm。衿には共衿が掛けられる。前幅は後幅より狭い。前身頃は肩から裾にかけて同寸。

仲田カメ（伊是名）旧蔵



2 芭蕉茶地絹経縞模様着物

丈134.5cm 衿（袖幅29.0cm 肩幅27.6cm）

布幅33.0cm 織密度（経26本 緯16本／1cm）

地糸は経緯ともに芭蕉か。機結び目がみられる。縞糸（赤・青・白）は、絹（座繰りで引いた糸）。染色の色材はみやこ染などの化学染料。

和服。木綿の肩当てあり、衿は棒衿。袖付の脇（人形）は9.5cm。男性用である。袖口は平袖。前幅は後幅より狭いが、前身頃は肩から裾にかけて広がっている。衿下に揚げの跡が残る。

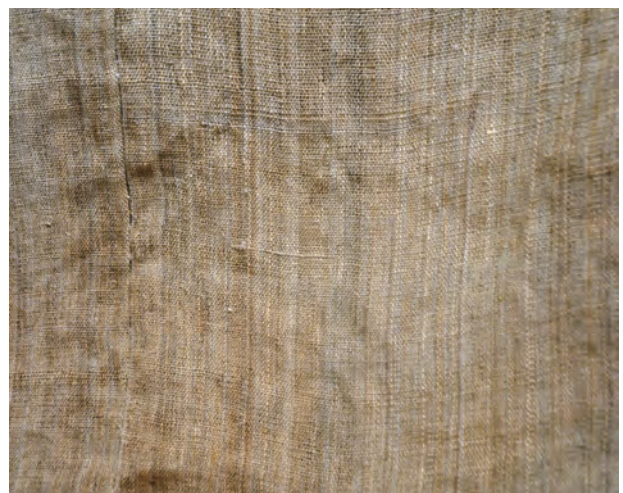
芭蕉布はオーサデン・ウワーサデン・オーフデンと呼ばれていたようである。



3 その他 ＊写真のみ確認



オーサデン・ウワーサデン・オーフデン（芭蕉着）
東江君（伊是名）旧蔵 ＊柄入り（型付け）



オーサデン・ウワーサデン・オーフデン（芭蕉着）
前川ウシ（仲田）旧蔵



オーサヂン・ウワーサヂン・オーフヂン（芭蕉着）
 ＊経緯とも芭蕉。柄 ユッチリー
 前田カマダ（仲田）旧蔵品



オーサヂン・ウワーサヂン・オーフヂン（芭蕉着）



フィーター・ヒーター（琉装羽織）
 ＊双児繭で製糸した絹糸。経糸は別糸か
 タテジマ模様
 平田安（仲田）旧蔵

〔脚注〕

- 1 『伊是名村銘苅家の旧蔵品および史料の解説書：公事清明祭をめぐる公文書とご拝領の品々』伊是名村教育委員会 2007年
『伊是名村名嘉家の旧蔵品の解説書－伊平屋の阿母加那志の衣装と諸道具－』伊是名村教育委員会 2010年
- 2 『伊平屋村誌』伊平屋村役所 1955年
P39-40 衣服 *芭蕉布、木綿布、養蚕について記載
P224-228 十九附録
『伊平屋村史』伊平屋村史発刊委員会 昭和56年
P84-86 *芭蕉布について記載
P200-201 養蚕業
P355-356 綿花の製糸について
P433 高機の輸入
『伊平屋村 田名字史』伊平屋村田名公民館建設記念事業期成会 平成15年
P142-145 衣 *普段着、労働着等について記載
P145 織物用具
P189 織物と染色
『我喜屋字誌』伊平屋村字我喜屋区 2006年
P162 伊平屋診療所略史
P252 蚕と数え歌
P327・333・336・338・339・341
『伊是名村史 上巻（島のあゆみ）』伊是名村 平成元年
P25 織物 *芭蕉布の製作方法や染織に係る用具について記載
P109-110 躍進した養蚕業
『伊是名村史 下巻（島の民俗と生活）』伊是名村 平成元年
P20-25 一衣生活
P181-186 養蚕
- 3 P227-230 小野・漢那・早瀬「史料紹介 伊平屋新垣家文書」『沖縄史料編集紀要 第40号』沖縄県教育委員会2017年
*伊平屋村田名の国吉尔也によって書かれたもので、光緒五年（明治12年、1879年）に那覇へ注文する品が記されている。伊平屋からの注文品ということではなく、カタログのよ
うなものであったと思われる。
- 4 P358『伊平屋村 田名字史』伊平屋村田名公民館建設記念事業期成会 平成15年
- 5 聞き取り2017.2.26：MA氏（女性）伊平屋村島尻
- 6 P87 新田摂子「琉球絣の産業化に関する研究－近代沖縄における高機の普及－」『沖縄芸術の化学 第29号』沖縄県立芸術大学附属研究所紀要 2017年3月
- 7 P217 「沖縄県旧慣租税制度」『沖縄県史 第21巻 資料編11 旧慣調査資料』琉球政府1968年
- 8 P664「昭和7年 沖縄之蚕業 沖縄県 抄録」『沖縄県農林水産行政史第十一巻』農林統計協会 昭和56年
- 9 P185 「明治、大正、昭和十五年までの養蚕の推移」『伊是名村史 下巻（島の民俗と生活）』伊是名村 平成元年
*この表を参考に、與那嶺が表1を作成
- 10 P107-108「沖縄県産業振興十五カ年計画と伊是名」『伊是名村史 上巻』伊是名村 平成元年
- 11 大正9年創業の片倉製糸紡績(株)のこと（現在の片倉工業。富岡製糸場は世界遺産となる。）。
- 12 種子繭とは、種繭のことで、蚕種製造を目的として飼育した蚕の繭のこと。中国種、日中交雑種、欧日雑種などの品種を育てていたようである。
- 13 製糸を目的とし、真和志村松川に、昭和9年に設立された保障責任繭販売購買利用組合瑞泉社のこと。
- 14 聞き取り2018.10.16：U氏（女性）伊是名村仲田／大正12年生
- 15 P66-67「終戦当時の蚕糸業状況」『沖縄県農林水産行政史第十二巻』(財)農林統計協会 昭和57年
- 16 茨木県古川市にて明治20年創業の須藤製糸株式会社のことと思われる。
- 17 聞き取り2018.10.16 YN氏（男性）伊是名村字伊是名 昭和25年生
- 18 「本県製糸業が消滅 須藤製糸が完全撤退 古河」茨木新聞 2005年4月27日付

- 19 P11 第5表 大島紬生産反数（地域別）『平成13年度 伝統的工芸品産地調査・診断事業報告書 本場大島紬一』（財）伝統的工芸品産業振興協会 平成14年3月
- 20 2010（平成22）年3月、4月の筆者の調査で確認
- 21 明治40年12月20日の琉球新報の紙面に「みやこ染」販売の広告あり。みやこ染は日本橋の桂屋が開発し明治29年に販売が始まる。